

お面・神楽

環 眞沙緒子

お面が一つ欲しい

どんなお面でもいゝ、般若の面であらうと

天狗の面であらうとかまひません

それをすつぽり顔につけたら

私の顔の醜さも隠れるだろう

そしてせめてもの神楽舞にうき身をやつたいのです。

私達は生きて居る間、神楽を踊らなければならないのです。

皆さんは・・・・・・・・まさか私の顔がこんなに

醜い容貌かまとは思はないでせう

きつと、色の白いやさしい好い男と

思ふかもしれません。

それを見て私はひとり北叟笑乍ら、

皆さんを偽はりつゝ神楽を舞ひたいのです。

世の中にはどんなに多くのお面をつけた人達が居る かもしれません。

ああ、お面が一つ欲しい是非欲しい

おかめの面でもひよとこの面でもかまひません。

これで皆さんにもお面が私達には無くてはならないと云ふことが

はつきりとお解りになつたでせう

さあ皆さん お面の欲しいかたは私と一緒にお面を 求めませう

・・・・・・・・そして神楽を舞ひませう・・・・・・・・

「山桜」昭和9年8月号

(詩)